



六
花

3

2021

りっかはいくかい

千載具眼徒埃



山田六甲

萬

高御位山へ額づき麦を踏む
西行忌待賢門院璋子かな
鶴玉を手のひらに雪しまくのか
櫓の音と野面積なる雪の城
博多から帰りがけなり雪の蕎麦
五ヶ瀬川流一寒の岩戸かな
天岩戸寒くて白き川を注連
穴倉の杖立温泉阿蘇近き
べるぎいのふらにね愛のチヨコレート
いくたびも歯を磨きては冬ごもり

鶴玉は丹頂の頭骨で紅色

宮崎県五ヶ瀬川流一さんの故郷

ベルギー王室御用達の老舗

初場所やすまうなのりは六花
狛犬の啞へし珠の氷柱かな
出初式夫に黄色の声が飛ぶ
六甲に既視感春の雪景色
道凍ててドボリユトルタの店の前
かの姫もこの白梅に凭れしよ
夕月に絹糸声なる枝垂梅
いかなごのもう出てゐしと迂闊なり
天皇もお年を召され誕生日
高明の遺句集肘の春炬燵
家猫の逃げ帰り来し春こたつ

ハンガリーの菓子店視察

絹糸声（キヌイサーの大城さん死去

令和3年2月23日みずのえとら

「千載具眼徒埃」とは「遅くとも千年後には、私の絵を理解してくる人物が必ず現れるだろう。」
という言葉を残した裏には、狩野派など主な流派に属さず、独自の画法を確立した若冲の言葉

有りとおある祈り◎笹村 政子

生けるもの生きて春待つ霜夜かな
寒月の入りたる雲を出でにけり
風花を目に追ふ海の果てしなし
あけぼのの澄みたる空や息白し
庭に黄のひと色として石路の花
やがて止む雪ぞいそぐないそぐなよ
千年の光陰ありぬ冬すみれ

大いなる言葉を欲しや春隣
白鳥の癒えむがために舞ふ日かな
有りとおある祈りの中に寒茜

▽生けるものとは「生きとし生けるもの」の生き残りでこの世に生きているすべてのものがこんなに
厳しい霜が降るような夜にも、寒さに耐えて生きて春を待っているのだなあ、という感慨。お嬢さん
を亡くした政子に即して鑑賞したいが、亡くなった者を思いつつ生きている者への慈しみの気持ち
強いと見た。しかし、そんなにお利口さんにならなくてもよい我慢しては辛すぎる▽寒月の句、寒月
を一時的に隠した雲を過って再び出てきたのを詠んだのである▽庭に咲いた石路の花は初冬の寒さ
を、暗さを、払う明るい黄色である▽「いそぐな、いそぐなよ」とリフレインで呼び掛けているのは、
自らにだろうか、病んでいたお嬢さんにだろうか。お嬢さんにだったら、これほど虚しい呼びかけは
ない▽舗道の割れ目にけなげに咲いているすみれを主宰も通るたびによく咲いているなあと感嘆しな
がらも、枯れるなよ、と心の中で呼びかけて通る。寒さに耐えながら、舗道の割れ目は土埃の土壌だ
けに根を張っているその命に「よく生き抜いているねえ」と呼びかけてもいるのである▽「有りとお
ある祈り」とは「ありとあらゆる」の略だろう血を吐くような祈りでも届かぬ時もある。

これが人生◎志方 章子

湯気たてて我が先行きを思ひけり
紅葉して我が人生の最終章
木の葉散るこれが人生ならむかな
父母も夫も居りたり冬の星
冬ぬくし親子で違ふ心うち
着ぶくれて経をあげぬる女房かな
人影の夫かと思ふ障子ごし

瞬けるもの皆夫や冬の星
一人居と知りてか小鳥来たりけり
切干を炊いて夫居し日を思ふ

▽人も山も紅葉の時を迎え、やがて散る。これが逆らうことのできない運命、定めなのである。と達観している句であるが、人はそうそう達観は出来ぬ。西行でも思いの適わぬ恋愛の為に武士を捨てて仏道の道を探ったらしい（今研究中）。探っても探っても見つからぬ迷いに苦しむ。それが人生だろうかと章子は章子の道で思う▽着ぶくれて、という客観的自画像が章子の目指す道を示唆しているような気もするし、女房という客観的な形容も良い▽障子の影に幻影を見る。山崎まさよしの歌に、街を歩いても「あの人ではないか」と振り返る歌がある。似ている人がいると後を付けて行きたくなる。障子の影に亡夫かと間違うのも解かる▽「着ぶくれて」も軽みがあって面白い。懸命に夫に経をしているときふとご主人の眼に移り変わって、自らの着ぶくれた姿を客観して可笑しくなったのであるう。亡くなったご主人をいやというほど詠みなさいとすすめたら、驚くほど早く俳句の心を取り戻した。笹村・志方・升田は夢風撰候補にならないが、三役以外なら間違いなく夢風撰▽冬の輝く星はすべてご主人に思えるのだ。

はまなす抄

柿干して◎升田ヤス子

桃吹くや一切の色拒みつつ
冬銀河異国より来る子の写真
仏足石ここにあります朴落葉
散紅葉すなはち鯉の浮かびくる
香炭の昼をしらじら報恩講
知られたくなきやうに咲く柊は
首飾り作りてみたし秋珊瑚

太陽の大きくなりぬ柿干して
剥きあとのなまめかしける柿を干す
見るとなく見る雑炊の噴気孔

▽柿を干したからではないが太陽が大きくなったというのが客観写生を超えている詩である。干柿は太陽と風の力なくして出来ない。因果関係はまったくないが太陽を大きくしたというのはすごい。柿の実が干されたのを見て太陽も力を出し始めたのだろう。卑弥呼みたいなヤス子ちゃんである。三役以外なら夢風撰。一句目の「桃吹く」は綿の蒴果が裂けて、中の綿がふきだすことをいう。コットンボールといわれる実が桃の形状に似ていることから、「桃吹く」の季語になった。桃吹く季節は秋で純白な綿の実は桃色かと思うが白以外にはあり得ない▽朴落葉が人の足のよう大きい。それを仏の足のようなとみたのはさすが▽雑炊の煮立つ表面の穴をしげしげと見ていると別府の坊主地獄のようだなあとひと時を忘れて魅入る気持ちまで温かくなる主婦の眼休め。見るとなく見るが佳い▽六句目のヒイラギの花は小さく目立たないが香りはすばらしく高潔な香り。それにしてもヤス子のいうように出来る限り人に見られたくないのかも。もう一度いうが「柿干して」の句はすばらしい。

聖五月抄

枯野辺◎善野 行

中村哲医師一周忌

こんなにも晴れて師走の朝の月
水脈広げ来るつやややかな鴨の胸
鴨の水脈延ぶるや胸のすく思ひ
落葉踏み来て切株の新しき
枯野辺のはやき流れの水路かな
先にゆく影に遅るる枯木道
父母のみて熱々のおじやかな

雑炊を食うて一枚脱ぎにけり
さざ波の途切れてをりぬ初氷
行く年の手帳に逝きし人の数

△中村医師が凶弾に倒れてから一年。アフガン国民への医療活動や国内の農業復興支援に尽力してきたが、2019年12月、東部ジャララバードで殺害された。日本国はこの人に対してちっぽけな勲章を授けたが、本来なら国民栄誉賞を与えても良いのではないか。実は国の意見を聴かずに行動を起こしたのが、役人や政治家の妬みをかったかららしいという噂も。「こんなにも」という言葉の裏に、「勿体ないことだ、恥ずかしくないのか」という怒りが込められているよう△落葉の句、おびただしい落葉の中を歩いてきて、この樹もこの秋、葉を振るい落としたのだろうが、切株はもう新しい芽吹きはなはずの樹なのに生きていような瑞々しさだと感動し、死によって生を見出したのである△「おじや」は作るときに「じゃじゃ」ときこえるから接頭語の「お」を冠して「おじや」となった女房言葉で「おかゆ」ともいう△「初氷」の句、我々関西では初氷は分厚いものでなくガラス板のように薄い。その氷の初めて張った境目を詠んだ△行く年の句。今年も何人かの知人友人が逝ったその感慨で、手帳を振り返る。その人数分だけ追悼句を詠んだのだ。

りんご◎住田千代子

沈香のほのかな中に障子貼る
絡繰のさはぐ時計とゐる夜長
庭木刈る音のやさしき日和かな
日溜りの沓脱石に小鳥来る
ひと切れは兎の形に剥くりんご
蔭に垂るそれでも郁子は熟れてをり
秋障子満天星の影丸くあり

見晴らしの良き吉日に鴨来る
破れ芭蕉門かかる寺の木戸
山茶花のさざれ石へと散りにけり

▽「沈香」を焚きながら障子を貼る。ゆったりと生活を楽しむゆとりが羨ましい。そういう生活にたどり着くまでには何かと心労もあったに違いない。障子の張替えは私の母も楽しそうに小唄を歌ったり口三味線でリズムをとっていた記憶がある。子供達は前の肱川へ障子を持って行き川に浸す。しばらくして紙剥がすのである。障子の棧を持ち帰って母が新しい障子紙を貼るのである。主婦にとって楽しいことなのかも知れない▽絡繰は「からくり」で、からくり時計がにぎやかに時刻を知らせるのが却って寂しい。それも秋の夜長というのが、さもあらんと思う。秋の夜は人に時を考えさせる。長く感じる時とさほど長く感じないときと、その時の気持ちの状態による時間空間も時には歪む▽りんごの句も上手い。何切れか剥いてそのひと切れに遊び心を使った主婦の智慧と遊び心▽山茶花がさざれ石に散ったというのが佳い。山茶花はたしかに散るがどこに、何に散るかで物語が違って生まれる。俳句は創作だと改めて思う。散り方が良否を生む。ここでは散り方とさざれ石とが響き合うのだ

凍鶴◎藤生不二男

窓辺にも立ち寄り来たれ冬かもめ
一木の散るをいそがず春隣
はみ出せる松の一枝笹子鳴く
凍蝶の死の遠のける夜明けかな
茶の花の灯りたる黄の動かざる
音もなく肩に跳ねたる初霰
凍鶴の癒えなむとして凍つるなり

風花の手の温もりに消えにけり
照り返す雪の日差しや寒椿
海光の貫く冬木癒えにけり

▽私なら句に具体性を持たすため「海光の……冬木……貫きぬ」とするが不二男はそれでは表現が気に入らないのだろう▽人の死は潮の満ち干に大きくかわりがあることは千年まえに陰陽道で知られていたこと。息を引き取るのは・二時・八時・十四時・二十時の時刻のどれかと言うことになり実際に医学の発達した現代においても臨終の患者を抱える医師はこの時刻を気にするという。凍蝶も動物であるから夜明けに死から免れたというのは解かる。凍蝶をじつと観察していたのでなく「そうであろう」ということを詩と決定して昇華させたのだろう。凍蝶はとりもなおさず比喩の産物である▽茶の花の句は句の句眼は動かざるに有ろうかと思う。この辺は不二男らしい独創的な捉え方だが、黄色と灯りたるが手あかの付いた言葉でなければいいが。そういう陳腐な部分を徹底的に排除すれば不二男は一流俳人になれる。仏教でいう小乗を超えることだ。「初霰の句」「風花の句」もしかり。「跳ねたる」でなく「跳ねゐる」なら打たれながら霰を楽しんでいる風雅ぶりが出る。

落語家のお辞儀は鏡餅となる 田尻りさ

正月の寄席で発見した。たしかに落語家のお辞儀を正面から見たら鏡餅に見える。後で気がついたらもうより瞬時に鏡餅に見えたという方が当たってしよう。正月だけでなく寄席を見るたびに思い起こす。

らくごかのおじぎはかがみもちとなる たじりりさ

乾つ風の夜を走れる三の宮
臘梅の咲き初めに人振り返る
年末や手を繋ぎ行く老夫婦
愛すこと止めて近江の雪の原
虎落笛団地の角を回り行く
閉院の間近な医師の秋半ば
歳末の月夜の街を列車過ぐ
落語家のお辞儀は鏡餅となる
楡の間に冬日の正午を見上げけり
灯を消すや練炭の目の二十四